

白間津のお花畑の写真(千葉県南房総市提供)と、書籍「海女たちの四季」のイラスト



南房総の海女とお花畑

絵と文・熱田親憲 題字・熱田泰華

紀伊・房総

くろしお物語

◇11◇

私の記憶ではJRが 南部のお花畑を観光す
まだ国鉄だった時代、 る半島一周の列車が臨
3月に入ると房総半島 時運行され、線路沿い インターネットでも紹

で手を振ったものだ。

最近では菜の花やスイ

セン、キンセンカ、ポ

ピーなどのお花畑と、

その花々を楽しみなが

ら走行できる道路「房

総フラワーライン」が、

インターネットでも紹

介されている。

なぜ、房総に多くの

お花畑が誕生したのだ

ろうか。テングサやサ

ザエ、アワビを取る海

女の稼ぎだけでは生活

できないので、副業と

して花づくりを思いつ

いたのだと切々と述懐

している海女さんがい

た。「海女たちの四季」

(新宿書房)という自

叙伝の著者、故・田仲

のよさんだ。田仲さん

は千葉県七浦村(現・

29歳の突きん棒漁師の

夫と結婚した。翌年、

長女を出産。47年、次

女が誕生したときは戦

後の混乱期で母乳が出

ないし、ミルクを買う

金もない。夫は三陸に

漁師として出漁し、残

された彼女は子育てに

農作業、夏の間は海女、

冬場は日雇いの山仕

事。それでも生活が苦

しく、3人目を身ごも

ったときは、ひそかに

流産を願ったと振り返

生活苦から花づくり

南房総市千倉町)白間
津に生まれ、20歳で海
女になった。

っている。このときの
母親の気持ちは、私に
は書けない。

る目を養った場所であ
った。
女性、いや人間は、

白間津は、海女の村
というより、カジキマ
グロを鋸で突く突きん
棒の村で、夫が三陸・
北海道に遠出するの
で、1年の半分は妻の
「ひとり親状態」との
ことである。

生活苦から脱却する
ためプロの海女さん
になったが、生活は安
定せず、同じ境遇の子
持ち海女さんの仲間
と相談して、副業とし
て田を壊して金にな
る花づくりを始めた。
これが今日のお花畑
の原点である。注目し
たいのは、彼女のマ
思う。

こんな環境の中で生
まれた著者は1942
(昭和17)年、21歳で

力の持ち主であるこ
とを教えられたように
思う。